「信仰を働かせよ」
～あなたは信じていますか？～

Ⅰペテロ１：４～９
マタイ１１：２０～２９

私たちは今までに身につけた能力や覚えてきた記憶というのは大脳の中には残っています。しかし普段の生活の中で、必要でなかった時には忘れているのと同じ状況になっているのかもしれません。私たちを取り巻く環境が変わり、いざ必要に迫られたりすると思い出してくるという事がよくあります。私たちは本当に忘れてしまったわけではなくて、目の前に平和な環境があるので、身につけた能力が発揮できないだけなのです。大切なことは目の前に必要な状況が出来た場合、私たちの能力を用いる事ができるのか、それともできないのかということです。（Ⅰペテロ１：４～９）ペテロが書いた手紙です。ペテロとはどんな人とイメージするでしょうか。熱い人、荒々しい、喜怒哀楽が激しい、逃げちゃう、感情的、大失敗をした人･･･とでてきますが今日読みました聖書には「信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊い（Ⅰペテロ１：７）」と語っています。この言葉はペテロが実際に経験したことの証しとして書かれています。これまでの間ペテロは何度も何度も試練に合いました。時には迫害に合いました。そして最終的には逆さ十字架につけられて殉教したと言い伝えられているほどです。しかしシモンと呼ばれていた時のペテロはまさしく「揺れ動く葦」のようでした。言葉と行動が全くといっていいほど違っていました。シモンがペテロになるためには並大抵のことではありませんでした。私たちには想像もできないような大きな苦しみを乗り越えてこそ、Ⅰペテロを書ける人物へ変化したのです。ペテロが信仰告白をした（マタイ１８章）場所はヘルモン山の麓でした。そしてヘルモン山（標高400m）から湧き出た水はヨルダン川となって、ガリラヤ湖（海抜マイナス100m）に流れ着き、そして死海（海抜マイナス400m）に至ります。ヘルモン山はとても美しく、緑にあふれた場所です。ガリラヤ湖を通過して死海に至ると生物が生息するのが非常に困難な所になります。このようにペテロもイエスキリストを神の御子キリストですと告白した所から、死海のようにいのちを生み出さないような、大失敗を繰り返しました。そこで学んだこと「あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。（マタイ２０：２７）」ということでした。イエスはヘルモン山から死海にいたる自然を通してでもこのことを伝えています。さて歴史をみるとユダヤ人は迫害の中にありました。周辺の国々からいつも攻められてきました。ですからユダヤ人の気質の中に周りに対する恐れや失うことに対する恐れを生み出していくほどでした。ペテロも同じように漁師をしていた時も、いつ嵐になり自分のいのちが失われるのではないかと恐れていました。だからガリラヤ湖を渡っている時に嵐にあうと、右往左往し失敗をくり返すことになります。（マタイ１４：２２～３３）ペテロはイエスが船に近づいたのが分かっていても尚、恐れていたため「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。（マタイ１４：２８）」と疑っています。私たちも問題に直面した時「もし神さまが本当にいるのならば･･･」と祈ったりしないでしょうか。ここまでペテロを見てきますと、私たちに似ていると思われたのではないでしょうか。（マタイ１１：２０～２９）マタイ１１：２７～２９はとても有名ですが、これはカペナウムに向かって語られた言葉です。カペナウムではイエスキリストはいろいろな癒しや奇跡を行ってきました。しかし悔い改めることはしませんでした。同じ罪を犯して滅んだソドムという町が滅びた時はイエスキリストの救いがなかったので罪は軽いといわれています。反対にイエスキリストを目の前にして、奇跡を見ても悔い改める事ができなかったカペナウムの方が罪が重いと伝えているのです。今の私たちも同じです。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。（Ⅰペテロ１：８）」と書いてあるように、生きているイエスと共に歩んだ時は失敗の連続でしたが、イエスが昇天されたあとはどのような試練の中にあっても信仰をもって歩んでいきました。これは今の私たちと同じです。ではペテロはどのように歩んだのでしょうか。信仰をどこで働かせてきたのでしょうか**①恐れ（エゴエイミー）**に対してです。エゴ・エイミーとは「私はある」という意味です。主が私たち一人ひとりと共にいるからこそ、恐れる状況になったとしても信仰を持って乗り越えることができます。私たちにとって恐れてしまうこと、不安に思うと、そこに対して向き合うことをせず、逃げてしまうことがないように信仰を働かさなくてはいけません。私たちは恐れに立ち向かっていくと心はとても疲れます。しかしイエスはすぐ後で「あなたがたを休ませてあげます」と語っているのです。たとえ失敗をしたとしても、恐れて逃げてしまうことをせず、そこに留まり、信仰を働かせてするべきことができるようになっていきましょう。信仰を働かせるとは「神は必ず解決してくださる」と信じることです。ペテロは様々な苦難に合いますが、その中で良くなり続けていきました。ですから私たちは「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。（ヤコブ１：１２）」に書かれているように喜びとしていきましょう。大切なことは恐れる状況に対して逃げずに、主の解決を信じて前へ進む、足を踏み出すということです。それは苦しいものではありません、イエス様がくびきを負っていますので、私たちはついていくだけです。だからそれはとても軽いのです。私たちは恐れず踏み出していきましょう。信仰をどこで働かすのでしょうかそれは**②試練と重荷です。**「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。（マタイ１６：２４）」自分の十字架とは何でしょうか。自分自身の十字架、すなわち私たちの苦しみ、痛み･･･のすべては既にイエスキリストが負ってくださいました。ですから自分の十字架とは自分の周りにいる方々の重荷です。体内のホルモンで他人のために行動すると活性化する物質があり、そのホルモンによって元気になることが分かってきました。これはナチュラルキラー細胞（ＮＫ細胞）に属していて、腫瘍などの自身の体に対して悪く働く細胞を壊す免疫作用があります。私たちは他人のために生きていかないと癌などの病気になってしまうということが医学的に分かってきました。なので、私たちは自分のための重荷ではなく、周りの人のための重荷を負い、問題に対して逃げない事が大切なのです。そこに信仰を働かせ、「この問題、重荷を負いきることができる」と信じて踏み出す事が大切です。重荷を負い、試練を乗り越えて祝福がない人はいません。祝福を信じて進んでいきましょう。また信仰をどこで働かすのでしょうかそれは**③イエス様と将来です。**（ヘブル１１：１）イエスキリストは、自分のために死んでくださったのです。それによって私たちは赦しをえました。ですから将来は必ず祝福されることを信じることが信仰です。私たちにはまとわりつく鎖や足かせがあるかもしれません。それが良い事をしようとするのを妨げます。鎖や足かせがなくなったら、私たちは自由になります。この自由には責任が伴うのです。しかし私たちは勘違いしています。足かせや鎖が責任だと思っています。しかしそうではありません。責任とは私たちを元気する源です。私たちの足かせのために十字架にかかったのです。いちじくの実を枯らした記事が書かれています。当時は葉が茂ると収穫ができるのが常でした。しかしイエスが通られた時は実ができずにいました。これは見せかけだけの人生を歩んでいることをさしています。そのようなことは止めなければいけません。私たちが将来、実を実らすためにも足かせを取り、プライドや着飾ることを捨てて、正しく歩まなければいけません。そうすれば結果は後からついてきます。まずは恐れずに足を踏み出すことから始めていきましょう。そして己の肉に死に、試練と訓練を抜けたら将来があることを信じて歩んでいきましょう。（要約者：平澤一浩）